

# メディア・リテラシーの批判的検討<sup>1</sup>

英語教育の実践を分析対象にして

中西 満貴典\*

## A Critical Study on Media Literacy: Analyzing the Practice of English Language Teaching

NAKANISHI Mikinori\*

### Abstract

Recently, Media Literacy has been gaining more and more attention. One of the most important key words in the study is the word 'critical' or 'criticism'. The target of previous studies of 'criticism' in Media Literacy has only been to investigate the intentions of media producers and their biases. Very little has been done to examine the relations between the power and signification by the media. This study aims to examine these significant relations and clarify the concept of 'critical' by critically reviewing the practice of English Language Teaching (ELT) in college.

The reason why I conducted a study on Media Literacy in regards to ELT is due to the term 'globalization' and its relation to the spread of English in the world. In ELT, I believe that it is meaningful to consider the potential problems which come about when trying to make Media Literacy successful in the classroom.

This study consists of three stages; firstly, to reconsider the 'critical' viewpoint, the theoretical core of Media Literacy; secondly, to discover what kind of problems appear in exercising ELT combined with Media Literacy; thirdly, to search for undetectable ideas of 'criticism' which are apt to be passed over in mass media when considering globalization. My wish is that such study will help strengthen the theoretical base of 'criticism' when teaching Media Literacy in the classroom.

### はじめに

近年、注目を集めているメディア・リテラシー（以後ML）研究・実践の鍵概念は'critical'（以後「クリティカル」）である。その主眼とするものは、メディアが呈するテキストを無批判に受けとるのではなく、独立した個人（individual）が批判的に言説（ディスコース）を吟味して主体的に判断し

行動することができる市民を育成しようとする理念である。しかし、その実践の批判の対象はメディア制作者の意図やバイアス（オーディエンス側も含む）の解明の段階にとどまりメディアの意味表示（signification）とその権力作用についての関係と教育実践の方法を問う研究はほとんどなされていない。本稿では、とくに英語教育の授業実践研究（高等教育における）の分析を通じて、

\* 愛知県立岡崎東高等学校

グローバル化する今日の世界においてMLが目指すべき「クリティカル」の概念の射程を再検討する。

英語教育を研究対象として設定するのは次のような理由による。中学から大学に至る英語教育においてコミュニケーション能力の育成を重視することが叫ばれている。ところが、英語は意思伝達の言語媒体として自存するのではなく、グローバル化する世界環境との関係において存在する。それゆえに、「英語教育」についての考察なしでは、私たちが置かれている政治的、経済的、文化的状況を分析することは不可能である、といっても過言ではないくらいである。本稿では、伝達的コミュニケーションの道具としての言語教育をいかに展開すべきかという技術的な問題ではなく、むしろML教育のなかで英語教育を実施することによって生じる問題をあえて掘り起こそうとする。このような研究の観点は、MLの「クリティカル」の概念を再考するに当たり有効であると考えられる。英語教育に従事している多くの実践者の多くが不問に付している一見自明に思われているものを問うことは、まさにMLの「クリティカル」の観点を再認識するための格好の演習の場になると考える。

本論は以下の三点の分析から構成される。

MLの理論の核となる「クリティカルな」視点の再考

英語教育に係る不可視な問題の抽出を英語教育のML教育実践の分析による探究

グローバル化する現在の世界において、不問に付されているメディアの「クリティカルな」側面の探究

については、(ア) MLの定義・目標、

(イ) MLの理論的根拠であるCultural Studies及び、その関連領域のCritical Discourse Analysisの問題意識の概観を通じて検討を行なう。 については、一般に英語教育をMLと関連させて研究を行なう場合、具体的にどのような観点から分析されるのかを考察し、そこから生ずる「クリティカル」の対象として開拓すべき領域を展望する。 については、メタレベルの省察を要する。今日のグローバリズムの展開と特定の言語媒体(英語)の世界的なひろがりとの関係に対して「クリティカルな」観点を設けるとしたらどのような議論が可能になるのか。また、その新たな議論はMLとの関連においてどのような整合性あるいは矛盾を見いだすのか、という観点に立って考察を行なう。以上の論点の検討によって、より効果的なML教育実践を展開するための理論的基盤を強化することをねらいとする。

## ・ MLにおける「クリティカル」概念の特性

### 2.1. MLの定義と目標

鈴木(1997:8)によればMLの定義は次のように記される(傍点は中西による)。

メディア・リテラシーとは、市民がメディアを社会的文脈でクリティカルに分析し、評価し、メディアにアクセスし、多様な形態でコミュニケーションを創りだす力を指す。また、そのような力の獲得をめざす取り組みもメディア・リテラシーという。

また、MLの先進国であるカナダ・オンタリオ州の学校教育におけるMLのすべての学

習活動の前提は以下の通りである（カナダ・オンタリオ州教育省編、1992:8-11）。

- (1) メディアはすべて構成されたものである。
- (2) メディアは現実を構成する。
- (3) オーディエンスがメディアから意味を読み取る。
- (4) メディアは商業的意味をもつ。
- (5) メディアはものの考え方（イデオロギー）と価値観を伝えている。
- (6) メディアは社会的・政治的意味をもつ。
- (7) メディアの様式と内容は密接に関連している。
- (8) メディアはそれぞれ独自の芸術様式をもっている。

上記のようなMLの目標が掲げられる理論的背景を概観するためにMasterman(1985:20)によるメディアと表象に関する記述を以下に引用する（カナダ符号及び下線は中西による）。

The first principle of media education from which all else flows, and to which teachers and students will continually return is ア) that the media are symbolic (or sign) systems which need to be actively read, and not unproblematic, self-explanatory reflections of external reality. Another way of stating this principle is to say that television, newspapers, film, radio, advertisements and magazines are produced. イ) The media, that is, are actively involved in processes of constructing or representing 'reality' rather than simply transmitting or reflecting it.

上記引用の重要点は下線部ア)、イ)に記されている。

ア) メディアは積極的に読まれる必要のあるシンボル（あるいは記号）のシステムであり、現実を問題なくそのまま反映しているものではない。

イ) メディアは、すなわち、事実を単に伝達したり反映したりするというよりもむしろ「現実」を構成したり表象したりするプロセスに積極的にかかわっているのである。

これらはさらに次のように要約される。

ウ) メディア（＝言語・記号）は現実（reality）の単なる反映ではなく、現実を再構成・表象するものである。

このような考え方はMLに始まったものではなく、Masterman(1985:4)も参照しているようにCultural StudiesのS. Hallの理論に多くを依拠している。実際、Hall(1980:131)は、言語は言語の外にある「現実」を単に反映しているものとしてとらえるのではなく、言語によって「現実」が生みだされるものとしている。つまり、「伝達の」コミュニケーション観を批判しているのである。伝達されるべき事実が先験的に存在していて、それを言語が伝達するという機能主義的な言語観を批判しているのである。

また、Masterman(1985:21)は、「より高度なイデオロギー性は私たちにとって自然で、中立的に見える」という概念を提示する。そして、さらに「メディアはそのようなイデオロギー性をになう媒体として機能する」のであるとされる<sup>2</sup>。

ウ) で言及したようにメディア（＝言語・記号）は現実を再構成し表象するものである。それと同時にメディアはまた合意

を生まだすものとしてとらえられる。したがって、「現実とは合意でありメディアが(字義どおり)媒介する」ともいえる。このような性格を帯びたメディアを経て表象される世界観は「文化的ヘゲモニー」によって支配的イデオロギーを促進することを通じて人々の思考を制約したり形成したりするのである(シルバークラット、2001:13)。このようにメディアはすぐれて「ポリティカルな」側面を有するものとしてとらえられる。したがって「メディア・リテラシーに取り組む者の役割は、メディア・リテラシーすなわち政治的リテラシーを持つ市民の進化と発展を促すことである(マスターマン、1997:45)」といえる。そうであるならば、MLは政治的リテラシーを養成する訓練の場としてとらえられうる。換言すれば、MLの目標は政治的リテラシーの獲得であり、その文脈のなかで「クリティカル」の概念の再認識を行なう必要があるのである。

## 2.2. MLの関連領域

MLとは別にCultural Studiesの流れをくむ研究領域としてCritical Discourse Analysisがある。それは社会文化的(sociocultural)及び社会認知的(socio-cognitive)な観点から談話(discourse)を批判的に分析するもので、批判的言語学(Critical Linguistics)やvan Dijk(1988)による社会認知的アプローチ、及びFairclough(1989)による社会文化的アプローチがある。van Dijk(1988)はテキストの産出・受容の認知的プロセスについて言語使用とコミュニケーションの社会文化的次元における論考を試みてニューステキストとコンテキストとのあいだの関係を論じている。Fairclough(1989)はディ

スコースを社会的実践(social practice)としての言語という観点から、現実によってディスコースは反映され、また反対にディスコースによって現実の変革もなされうるという弁証法的関係(dialectic relation)を見いだしている。

また社会学あるいは社会心理学・認知言語学によってフレームの理論が構築され<sup>3</sup>、ニュース言説におけるフレーム装置(framing device)がシンタックス構造、スクリプト構造、テーマ構造及びレトリック構造の側面から考察が行なわれている(Pan&Kosicki, 1993:5)。Gitlin(1980:7)の言葉を借りればフレーム理論とは「世界は多くの出来事に満ちている。たとえひとつの出来事のなかにも無限の詳細がある。フレームは世界で起る出来事について選択したり、強調したり、表現したりする原理」と表わすことができる。このような私たちの世界観を構成する原理は、「出来事にたいするわれわれの主観的な関与を支配する組織化の原則(Goffman 1974:10)」であり、社会全体にいきわたる「自明の常識」を形成する力の作用を受けているものである。フレーム分析は、日頃不問に付している常識や知識を成り立たせている条件を問うものである<sup>4</sup>。

このようにCritical Discourse Analysisやフレーム分析(Frame Analysis)の問題意識はMLの理念と共通するものがあり、今後それぞれの知見を用いてML研究が一層厚みのあるものに進展していくことが望まれる。

## ・MLの実践例(英語教育)の検討

日本におけるML研究・実践は、近年義務教育機関などで行なわれているが、中等教育における英語教育を扱ったものはほとん

ど見当たらない。本稿では、大学の一般教育における英語科目の指導において時事英語を用いたML実践例を考察の対象とする。大学におけるMLの研究・実践が高等学校や中学校における「総合的な学習の時間」の授業展開の参考になると考える。MLの基本的な観点は教育現場は異なっても共通であるからである。そして、MLでいうところの「クリティカルな」視点を、具体的な英語メ

ディアを教材にしたML教育の実践においてどのように据えているのかを分析する。

伊藤・斉藤（1998:137）による研究実践の目的は、「英語の活字や映像メディアの能動的なアクティビティーを通して、英語の四技能を伸ばしながら、メディア・リテラシーの本来の目標を達成していくということにある」である。その実践展開の要点を表にまとめた。

表 英語教育によるMLの教育実践

展開例	主技能	目的	
		Language	Media Literacy
1	Reading	英文記事の構成を知り大意を読みとる	メディアは構成されたものというキーコンセプトを意識化する
2	Reading Speaking Writing	英文記事の大意を読みとる	環境化しているテレビに対し主体性を確立
3	Listening Speaking Writing	main ideaを捉える、key wordsを聞き取る	コマーシャルのsales strategiesを見出し、メディアが商業的意味を持つという基本概念を意識化する

伊藤ら（1998:143）のMLの研究実践の自己評価としては、ア）授業形態（グループ活動）に対する高い評価、イ）各授業のMLの目標の確認、ウ）今後とも学んでいく意欲（学生の声）、というものであった。

このような実践についてMLの主眼とする「クリティカルな」視点からどのように評価すべきなのかを検討する。

展開例1はML教育の第一の基本原則（（1）メディアはすべて構成されたものである）の意識化をねらったものである。同日発行の英字新聞2紙<sup>5</sup>のフロントページを比較し、何がニュースになるのかをグループでブレイン・ストーミングさせている。また、英字新聞より12のヘッドラインを選択して提示し、このなかから5つの記事を

選びTV news programをグループで作らせている。実践後のアンケートで‘what you are aware of now’の項目における複数回答として、「新聞やテレビのニュースは編集者やプロデューサーにより異なったものになる」「同じ記事でも、二、三の新聞を読み比べてみるのがいいと思った」「同じ内容でもヘッドラインが違うと記事に対する印象が変わる」などをあげている。学生の回答をみるかぎり、「メディアは構成されたもの」という認識がある程度得ることができているようである。ML教育の第一歩として異なったテキスト（2紙の英字新聞）を分析することは意義のある実践と思われる。

展開例2は、「環境化しているテレビに対し主体性を確立」を意識化させる教育実践

である。具体的には、テレビが家族のコミュニケーションを阻害しているシナリオを読ませてグループで内容について話し合い、パラグラフごとにリーダーが発表するものである<sup>6</sup>。実践後の学生の感想として、「テレビ中毒になっていることを再認識した」「テレビを取りまく環境は世界共通」「テレビとうまくつきあっていかなければいけないと思った」などが複数抽出されている。この展開例では、「環境化しているテレビに対し主体性を確立」することが目標であったが、アンケートの回答をみてそれを達成したと評価しているようである。

展開例3は、ML教育の基本原則((4)メディアは商業的意味をもつ)を意識化させる目的をもって行なわれた<sup>7</sup>。学生の反応は、「特に子供たちにとってよくないコマーシャルの存在に気が付いた」「今までただ受け身の態度で見ていたコマーシャルだったが、これからは意識して見よう」「これまで気付かなかった販売戦略がわかってうれしい」を複数抽出している。

これら三つの展開例を経てこの研究の実践者は、「メディアを能動的態度で見るという動機付けになった」「学生のコマーシャルに対する興味と意欲が感じられる」というように研究実践をおおむね良好に評価している(伊藤・斉藤、1998:143)。また一方では、この実践を通して次のような問題点をあげている。

トピックを選択する際に、市民の基本的な人権を自覚させてくれるという点でマイノリティ市民やジェンダーの視点に立つことが望まれる。

英語教師も、いわゆるメディア研究の分野に精通し、メディア・リテラシー

における知識を深める必要がある。

通常の英語の時間内で、単発的にメディア・リテラシーの取り組みを行なうのでは圧倒的に時間が足りない(通年展開が望ましい。シラバス作成の必要性)。

英語教師が利用しやすいauthentic materialsを使った教材、教師用ガイド作りが望まれる。

伊藤らが研究実践を通じて提起した上記の問題点については基本的に同意したい。社会的・文化的に劣位に配置された集団の「まなざし」を共有するためにはMLにおいてどのような題材を選んでいかに読みを深めていったらよいか。英語教師のためのML教育を現職教育及び教員養成のプログラムにどのように組み込んでいくのが望ましいのか。また、MLを授業科目として系統的に展開する方法や教材をどのように開発していくのか、等々の課題が浮かび上がってくる。伊藤らの実践はMLを英語教育で展開するに当たっての具体的な問題点を明るみに出し、今後のML研究のための問題提起を行なった。本稿では伊藤らの研究の意義を十分踏まえたいうえでさらに議論を深めるために、提起された問題そのものを批判的に検討する。

筆者は、伊藤らの研究のもっとも大きな問題は のとらえかたにあると考える。最初に指摘すべきことは、「英語教師も、いわゆるメディア研究の分野に精通し、MLにおける知識を深める必要がある」において、メディア研究とMLの心臓部である「クリティカル」概念の吟味が十分ではないという点である。一般的に、英語教師はMLの教育実践のためにメディア研究の分野を勉強す

る必要があるといえよう。しかし、英語教師は具体的にメディアの何を研究したらよいのかは不明である。そういう漠然性は百歩譲ったとしても、英語を題材にして英語授業を展開するに当たって、一般に英語教師にはどのような視点が欠ける傾向にあるのかを問題にしなければならない。英語教師がみずからその「問題」を掘り起こさないかぎり、MLを実践していながら逆に英語教師の行為そのものがMLが批判すべき対象になりかねないからである。英語教育を展開する際に、英語メディアそのものに関係する「クリティカルな」概念を十分に吟味しなければ、研究実践者が評価していることがら（各授業のMLの目標を確認できたという多数の学生の反応）の真実性が疑わしいものになりかねない。MLのいう「クリティカルな」視点とは何か、を反省的に問うことなしに研究を展開すれば、単なる「メディアを用いた授業研究」のレベルに留まりかねない。このような視座に立って伊藤らの研究実践をさらに検討していきたい。

一般に、時事英語を教材にした授業研究はメディアの内容を読み取りながら、読む・聞く・書く・話すという英語の四技能の習得にも関心が向けられる。伊藤らの実践も例外ではない。その研究の目的に記されているように「英語の活字や映像メディアの能動的なアクティビティーを通して、英語の四技能を伸ばしながら、MLの本来の目標を達成していくということにある（伊藤・斉藤、1998:137）」と述べているように四技能習得が意識化されている。英語の授業であるゆえ四技能の育成そのものに異義を唱えるわけではないが、このような問題設定はMLの研究目標を曖昧なものにしかね

ないと考える<sup>8</sup>。ではなぜMLのために英語メディア教材を用いたのか。伊藤らが研究実践で設定した「メディアはすべて構成されたものである」「環境化しているテレビに対し主体性を確立」「メディアは商業的意味をもつ」というようなMLの目標を達成するためには必ずしも英語教材を用いなければならないことはない。さらに検討を展開すれば次のような問題が見いだされる。英語メディアを分析の対象として用いたからこそ問題にすべき論点が生じてくる。筆者は、英語メディアを教材にすることによって授業実践を行なうばあい、ML上「クリティカルな」対象とすべき点は以下の次元において現われると考える。

- (1) 英文テキストを通じて表象されるメディア制作者の特定の価値観や偏見
- (2) メディア内容を伝える媒介言語としてとくに現在の世界における大言語である「英語」を用いているという点

(1) 及び(2)の問題設定は、前者は英語メディアテキストが生み出す表象、後者はメディアテキストが英語で表示されるという「現実」を構成する不可視な作用力の次元に関するものである。(1)のようなことが意識化されていないと「同じ記事でも、二、三の新聞を読み比べてみるのがいいと思った」「テレビ中毒になっていることを再認識した」「今までただ受け身の態度で見ていたコマーシャルだったが、これからは意識して見よう」などの学生の反応をもってMLの目標が確認することができたと断じてしまうことになり、表層レベルでの分析にとどまる。メディアを通じて「われわれ」意識が醸成され、理解しえない（共生することのできない）他者像が生産（かつ再生

産)される構造こそ問わねばならないのではないか<sup>9</sup>。自明に思われているもの(常識とされているもの、合意されているもの)がどのようなテキストのせめぎ合いのなかで生みだされてきたのか(あるいは、生みだされようとしているのか)を分析の対象にしなければ、MLの目標は達成されえないのではないかと考える。

つぎに、(2)のようなより深層領域におよぶ問題について考察する。特定の言語媒体の世界的なひろがり、今日のグローバリズムの状況について「クリティカルな」観点を据えたとしたらどのような問題設定が可能になるだろうか。(1)の次元における問題設定は英文テキストの内容(英米のマス・メディアによる言説)の相対化を試みるものであった。一方、(2)の次元はさらにメタレベルにあって英米の言説(ディスコース)ではなく、英米の言語そのものの相対化をはかる議論にどのように向き合うのかという問題である<sup>10</sup>。Pennycook (1994:9-11)は英語の世界的な拡大が‘natural’で‘neutral’で‘beneficial’であるということを実際の次元としてとらえるのではなく、そういうことを唱える言説(ディスコース)レベルの問題としている<sup>11</sup>。MLの精神からすれば、一見したところ自明に思われるものや常識とされているもの(たとえば、「英語はコミュニケーションの道具である」という言説)は当然、「クリティカルな」視線を投げかけられる対象になるものと思われる。したがって、英語メディアをML教育の素材として使うかぎり、最終的には(2)の次元の問題は避けて通ることはできないのである。

## ・おわりに

MLを英語教育のなかで考えると具体的などのような問題が浮かび上がってくるのかを検討してきた結果、次のような課題が見いだされてくる。

ひとつにはグローバリゼーションをどのようにとらえるのか、という問題である。今日の世界的な大言語である英語が種々の分野におけるグローバル化を推し進めている役割を果たしているとしたら、そのような言語に対して単に伝達の道具としてではなく、私たちの世界観を形成する言語媒体であるとみなす視点も持ち合わせるべきであろう<sup>12</sup>。この考えは英語教育を否定する契機をつくりだすものではなく、英語教材を通じてより「クリティカルな」観点をもった柔軟な思考を養成することにつながり、ML本来の目的にかなうものである。「クリティカル」であるとは破壊的であることを意味するのではなく、むしろ創造的であるといえよう。たとえどんなに偏見や差別意識(顕在的であろうと潜在的であろうと)に基づいた英語メディアがあろうとも、それを「クリティカルな」対象の教材として用いるかぎり「教育的」になりうる。その意味において、伊藤らが説くように英語教師は「メディア研究の分野に精通」すべきなのである。

もうひとつの検討すべき問題は、本来的に公権力が管理する学校教育において、ML(政治リテラシー)を追求するということは究極的には何を意味するのか、である。MLの唱道者マスターマン(1997:45)が述べているように、「メディア・リテラシーに取り組む者の役割は、メディア・リテラシーす



なわち政治的リテラシーを持つ市民の進化と発展を促すことである。自明に思えるもの（常識になっているもの）に対して無条件に受け入れるのではなく、種々の言説に疑いをもって接し、メディア、すなわち言説（ディスコース）はすべて構成されたものである、と言い切ってしまうことは高等教育機関ならともかく、中等教育の現場に混乱を招かないだろうか。学校はある程度、規律・訓練の場として成り立っている。ものを考える力、柔軟な思考力とはまさにMLの目標とすべきものと同領域にあるが、学校という制度のなかでMLの目標がどのような整合性や矛盾を生じうるのかの議論もなされなければならないだろう。MLは日本では試行錯誤が始まったばかりの教育分野である。今後、学校教育の実践のなかで進展させていくためには、MLをめぐる諸問題を、まさに「クリティカルな」視点をもって、教師側が発見し論議を深めていくことが望まれる。

## 注

- 1 本稿は、第11回日本グローバル教育学会全国研究大会（2003.9.6 於神戸大学）で口頭発表（「地球社会時代におけるメディア・リテラシーの批判的検討（サブタイトルなし）」）したものにもとづいている。
- 2 Hall（1982:86）はメディアは合意を単に反映したり維持したりするものとしてではなく、合意を生み出すことそのものに寄与する機関としてみなす。
- 3 Goffman（1974:10-11）は現象学的社会学の知見に依拠してフレーム概念を提示している。
- 4 現象学的社会学についてはシュッツ（1980）を参照。
- 5 *The Japan Times*および*The Daily Yomiuri*を使

用。

- 6 その他、音読、ロールプレイ、状況の改善のためのディスカッション等の活動を含む。
- 7 音声を消してビデオを見て、何についてのCMか、伝えたいメッセージは何かをディスカッションさせ、ペアやグループでCMに使われている方策を見つけてさせる活動を含む。さらに同じ商品について学生たちにTVのCMを創作、発表させている。
- 8 伊藤らはメディア・リテラシーについて言及しているものの、英語の四技能の習得状況についての評価は行っていない。
- 9 本稿では「受容者」の関与についての言及を留保した。筆者は「受容者」概念を能動的であれ受容的であれ、メディアから独立して存在するものとしてはみなさない。むしろ、エージェントと言語媒体あるいは社会・文化的構造との関係は弁証法的にとらえられるべきであり、「受容者」は言語媒体及び社会・文化的構造とのせめぎ合いのなかで「主体化」されていくというアルチュセールを参照したCultural Studiesの立場を引き継ぐ。「受容者」概念への言及は検討すべき論点が多く、紙幅の関係上本稿では扱わないことを断っておく。
- 10 大石（1998:19）は西欧言説だけでなく西欧言語の相対化の問題を提示した。
- 11 中西（2002）は、戦後日本の国際英語言説編成の分析を行なった。
- 12 伊藤・藤田（1990:130）によればCultural Studiesは「伝達の」コミュニケーション観を拒否し言語は先験的に存在する「事実」を伝えているのではなく、言語によって「事実」が生みだされているという立場をとっている。それゆえに、MLがCultural Studiesの系譜にあるのならば、英語という言語を単なる意思伝達の道具としてみなしてはならないのである。

参考文献

- 伊藤晶子・斉藤早苗. 1998. 「英語教育におけるメディア・リテラシーの試み」『時事英語学研究』第37号：135-146.
- 伊藤守・藤田真文. 1990. 「構造主義以降のコミュニケーション理論」『新聞学評論』第39号：120-147.
- 大石俊一. 1998. 「反「英語支配」への視点 文学と思想の領域で」津田幸男編『日本人と英語 英語化する日本の学際的研究』15-23. 国際日本文化研究センター.
- カナダ・オンタリオ州教育省編. 1992. FTC (市民のテレビの会) 訳『メディア・リテラシー：マスメディアを読み解く』リベルタ出版.
- シュッツ, A. 1980. 森川真規雄・浜日出夫訳『現象学的社会学』紀伊國屋書店.
- シルバブラット, A. 2001. 安田尚監訳『メディア・リテラシーの方法』リベルタ出版.
- 鈴木みどり. 1997. 「メディア・リテラシーとは何か」鈴木みどり編『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』2-22. 世界思想社.
- 中西満貴典. 2002. 『「国際英語」ディスクールの編成』中部日本教育文化会.
- マスターマン, L. 1997. 宮崎寿子・猪股富美子訳「グローバルに展開するメディア・リテラシーの取り組み 目的、価値観、そしてスーパーハイウェイ」鈴木みどり編『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』40-55. 世界思想社.
- Fairclough, N. 1989. *Language and Power*. London: Longman,
- Gitlin, T.1980. *The Whole World is watching : Mass Media in the Making and Unmaking of the New Left*. Berkeley: University of California Press.
- Goffman, E. 1974. *Frame Analysis : An Essay on the Organization of Experience*, Boston: Northeastern University Press.
- Hall, S. 1980. 'Encoding/decoding' in S.Hall (ed.) *Culture, Media, Language: Working Papers in Cultural Studies, 1972-1979*. 128-138. London: Centre for Contemporary Cultural Studies, University of Birminham.
- Hall, S.1982. 'The rediscovery of "Ideology": return of the repressed in media studies' in Gurevitch, Michael (et al eds.) *Culture, Society and the Media*. 56-90. London: Methuen.
- Masterman, L. 1985. *Teaching the Media*. London: Comedia/Routledge.
- Pan,Z.and Kosicki, G. M.1993. 'Framing Analysis : An Approach to News Discourse'. *Political Communication* 10 :55-75.
- Pennycook, A. 1994. *The Cultural Politics of English as an International Language*. New York: Longman.
- van Dijk, T.A. 1988. *News as Discourse*. Hillsdale, NJ.:Lawrence Erlbaum Associate.